

# 提言への座談会

来年四月中旬のゴルバチョフ・ソ連大統領の訪日は、長年、停滞を続けてきた日ソ関係を軌道修正して、本格的な発展の道に乗せる転機になるだろうと言われている。日ソ間の最大の懸案である北方領土問題打開の突破口を開くのに、またとないチャンスだ。そこで、ゴルバチョフ訪日に先だって、ソ連問題に詳しい日本人学者七人による座談会を開き、日ソ関係改善の具体的な提言をもらった。

## 出席者

今井 義夫 (工学院大学教授)

木村 浩 (静岡県立大学教授)

木村 汎 (北海道大学教授)

佐藤 経明 (日本大学教授)

中嶋 嶺雄 (東京外国語大学教授)

西村 文夫 (静岡県立大学教授)

和田 春樹 (東京大学教授)

司会 白井久也 (朝日新聞編集委員)

以上、五十音順

来年四月中旬のゴルバチョフ・ソ連大統領の訪日を契機に、日ソ関係が大きく動くことが予測される。まず、戦後の日ソ関係をどう見るか。  
和田 戦後の日ソ関係は、日米関係の系だった。日本にとっては対米関係が重要で、サンフランシスコ講和条約とともに日米安保条約締結の道を進んだ。一九五五年から始まった日ソ国交回復交渉についてはこのため、「時期尚早論」が出て、国内的にもめたのち、五六年の日ソ共同宣言によって国交が樹立した。

しかし、領土問題で衝突して、その後の日ソ関係は不活発な状態になった。米ソ関係が劇的な転換をした状況の下で、日本としては日米関係を前提にしながら、日ソ関係を二国間の問題として、真剣に打開していく条件ができたと思う。

今井 ソ連は政治的には、米国のプリズムを通してしか物が見えない面があったが、日露戦争以来のソ連に対する反共的な見方が、日本の風土の中に定着していて、それが長い間政府の対ソ政策の方針だった。ゴルバチョフのペレストロイカの成否は別にして、ソ連の内情がオープンになったことは、大きな意味がある。

木村(汎) 日ソ関係の現状は、理想にはほど遠いけれども、それほど悲しくない。政治外交上は平和条約こそ結んでいないが、国交正常化は韓国よりも二十四年前に行われて、経済も、日本は西側の貿易パートナーとしてはドイツ、フィンランドに次いで第三位。文化的にも文化協定が結ばれ、大学院生の交流とか学術文化交流もあり、この間モスクワで開かれた「日本文化週間」では、花火や茶道のほかに

北島三郎ショウまで行われた。しかし、戦後四十五年たって、平和条約がないのはノーマルとは言えない。その点で平和条約の締結は、二国関係の基本的な最小限度で、最大の枠組みだと思っ。

西村 物事を現実的に考えてみて、日ソ関係がこういう関係であるのは、それなりに必然の流れだったと思う。ゴルバチョフが政権をとって六年だったが、あとの三年になってようやく、日ソ関係の物理的な意味での接近条件が出てきた。

佐藤 和田さんは、日ソ関係は日米関係の系だったと言われたが、同時にソ連の国内情勢の系という側面が、相当強かったと思う。例えば五六年の日ソ国交回復のときに二島返還は決まっていた。ところが六〇年の安保改定で、それは向こう側の一方的な発言になった。それにもかかわらずそれほど悲しくなかった日本の対ソ感情が、急激に悪くなったのは、六八年のチェコの軍事介入以降だ。だが、それもペレストロイカの化機を見て、「援助なくして改革なし」と、欧米がゴルバチョフ支援に乗り出すという対外条件の変化を受け

# 大統領のゴルバチヨフ

◆日本人学者



今井義夫氏

て、日本の対ソ親もかなり動いてきた。ある意味では、日ソ関係改善を図る好機でもある。

中嶋 新しいソ連が生まれ出てきたことよって、日ソ関係はすぐ中国までいかないにしても、改善の余地は相当あるのではないか。経済規模は中国よりソ連の方が、かなり大きい。その意味では日ソ関係は潜在性に比して、現状はまだ不十分ではないかと思う。

佐藤 ソ連の伝統的思考で、自分の思惟するものが正しいという考え方があったと思う。日中平和条約が先行すると、「日米中の対ソ包圍陣だ」と言う。まさに極端な被害妄想。

## 国益を損なう 二元・三元外交

——ソ連の対日政策、日本の対ソ政策をどう評価するか。

木村(浩) ソ連は欧米中心主義的な外交をごく最近に至るまで続けた。アジア特に日本を軽視した。ソ連の他国の国力評価は軍事力、資源、人口といった

ハードウェア中心の見方で、人間の目に見えない創造力、指導性、国民感情といった唯物史観では十分評価できない点に、あまり目配りしなかった。そのために日本の戦後の成長や発展を見落としたのではないか。

中嶋 政府自身がだらしないうため、自民党の各派閥が北朝鮮やソ連に一本釣りされるような状況になっている。ソ連が安倍派に伝えた「二島返還の問題も、ソ連側に問題があったよりも、日本の国内政治の生臭い思惑があった、それでああいう問題が出てきてギクシヤクシヤちゃったんじゃないか。

——まさに外交の一元化が重要だが、日ソ両国の外務省にまかせておいたら、何も動かない(笑)。

和田 木村(浩)さんがおっしゃるように、ソ連外務省の中にはまだ古いタイプの人っていて、いろいろ問題があるように思うけれど、ただ官僚的論理という点では日ソともあまり大きく変わらない。従ってここは、政治

姿勢にやっていたから、ソ連がそう思うのも無理がないような気がする(笑)。

西村 日本が対ソ外交をやる場合、誰がイニシヤティブをとってやるのか。北朝鮮の問題と同じようなことが、ソ連との関係でチラホラ出てきつつある。

二元、三元外交は日本の国益を損なう。

中嶋 政府自身がだらしないうため、自民党の各派閥が北朝鮮やソ連に一本釣りされるような状況になっている。ソ連が安倍派に伝えた「二島返還の問題も、ソ連側に問題があったよりも、日本の国内政治の生臭い思惑があった、それでああいう問題が出てきてギクシヤクシヤちゃったんじゃないか。

——まさに外交の一元化が重要だが、日ソ両国の外務省にまかせておいたら、何も動かない(笑)。

和田 木村(浩)さんがおっしゃるように、ソ連外務省の中にはまだ古いタイプの人っていて、いろいろ問題があるように思うけれど、ただ官僚的論理という点では日ソともあまり大きく変わらない。従ってここは、政治



木村 浩氏

佐藤 官僚機構はソ連だらうが日本だらうが、似たところがあわけて、高度な政治判断、派閥力学でない政治の指導性がやはり必要だ。

木村(浩) ソ連外務省はペレストロカカされていない部分が、非常に残っている。領土問題は全体的に柔軟になってきているが、「領土問題は存在しない」という時代が続いて、そのときの担当者が今でもいる。ゴルバチヨフが来日すれば、ブラクマチックな人だから、すぐ日本びいきになると思うけれど、ロシア・インテリゲンチヤは、昔から西洋を向いている。私はおとしも去年も今年も、ソ連に行っている。去年、おとしは作家同盟の招待だったのだが、ビザを拒否された。ソロビヨフ大使(当時)とかけ合ってビザを出させたが、上の方にまだそういう体質が残っている非常ににつきりした例証だ。

和田 木村(浩)さんがおっしゃるように、ソ連外務省の中にはまだ古いタイプの人っていて、いろいろ問題があるように思うけれど、ただ官僚的論理という点では日ソともあまり大きく変わらない。従ってここは、政治

家が政治的に決断していかねばならぬ。

今井 私なんかは、ソ連に留学してもできるだけ、日本大使館には近づかなかった(笑い)。たまに大使館の中に入ると、館員はソ連人の悪口ばかり言っている。これで対ソ外交がうまくいくはずがない。

——日本外務省の体質もあるのではないか。戦前はドイツ派が主流で、戦後は米国派が主流だ。ソ連をやっている人たちは、傍流に置かれてきた。

西村 外務省の役人にしろ政治家にしろ、われわれ国民が彼らを養ったり選んだりしているわけで、国民感情とは無縁ではない。外務省が駄目だとか自民党の一部が駄目だとか、批判ばかりしては足元をすくわれ

る。——米年四月中旬の「ゴルバチョフ訪日」の歴史的意義を、どう考えたらよいか。

和田 ソ連邦ができてから、最高指導者が訪日するのは最初だから、その意味で歴史的な意義がある。ゴルバチョフがやった最大のペレストロイカは対外関係で、アジアでは、「中ソ」「韓ソ」と解決してきているので、



木村 汎氏

### 過去五回逃がした訪日機会

残っているのは「日ソ」だけ。ここは彼の面目にかけても、最高の決断をして欲しい。

木村(汎) ゴルバチョフはいままでに訪日のチャンス在五回逃がしている。書記長になって初期のときに来れば表敬訪問で、お土産は少なくてすんだ。二度目に東芝機械事件とかスパイ合戦が行われる前。日ソ関係が少し上昇機運にあったときに来ればよかった。三番目は中曽根政権という安定した政権のときに来ていれば一種の取引ができたのに、そのあと日本の政局が不安定化して、交渉相手が誰だか分からなくなってしまう、中曽根から金丸、竹下、小沢、安倍に行くべきか混然とした状態に



佐藤経明氏

なっていました。四番目に昭和天皇のご大葬のときに来ていれば、ポケットに入れてくる香典も少なくてすんだ。五番目にこれがいちばん大きいのが、民族問題が噴出してきて、彼が領土問題を解決しようと思っても、返せない状況になった。エリツインのように日本側に受け入れられない北方領土の五段階返還論のようなものを安易に持つて来ると、誰も成田空港に見送りに行かなくて、米なかつたほうがよかつたということになる(笑い)。外交で点を稼いできたゴルバチョフが初めて、外交上成果

を上げずに本国に帰らなければならなくなるかもしれない。中嶋 そのとおりで、われわれにとって日ソ関係はものすごく大きいし、ゴルバチョフ訪日も大きい。ソ連から見ると果たしてそんなに大きいものか。ゴルバチョフになってから大きいのは、今回解決した東ドイツの問題。去年以来の東欧変革仕掛け人になったと思われる一連の東欧訪問。もう一つは去年五月の中国訪問だと思う。

西村 ゴルバチョフが来なかつたことよって、彼の重庄になつていいる面は確かにあるが、その点をあまり強調し過ぎて、何もかもそこでいっぺんに解決しなければならんと、われわれが期待するものもいけない。とにかく気軽に来てごらんさい、という気持ちも持つていていいと思う。

派は、西欧主義でどうしても西側を向く。今度のゴルバチョフ訪日は、西向きソ連が初めてグローバルに極東にも足を伸ばしてくる一つの大きな転機だろうと私は見ている。アジア・太平洋圏で、日本とパートナーシップを組もうと呼び掛けるのは、米国から離れたところで、日本人自身が世界の政治にどう動くのかということ、ゴルバチョフの能力テストではなくて、日本人の国際感覚や国際政治能力が問われる機会だと思つた。

佐藤 ソ連はアジア・太平洋圏にエントリーしたがっている。戦前からずっと続いた対米、対欧州志向が、アジア・太平洋に向かうための糸口をつけるという意味で、ゴルバチョフ訪日の意義は大きい。しかし、エントリーの入場券を持つていいるのは、日本だ。日本には一つのバーゲニング・パワーがあり、ソ連が二十年ぐらいの視野で入れるようにドアを開けてやることは日本はもちろん、ソ連の経済や対外政策にとって大きい意味を持つ。

ばん問われると思う。国民感情の問題が大きいの、戦後一貫して日本人がいちばん嫌いな国はソ連だった。逆に向こうは去年の調査で、いちばん好きな国は日本がトップになったという話があったけれども、このギャップが非常に大きい。この春から例のシベリア抑留者の問題が出た。それから日ソ中立条約を無視して攻め込んできたという問題。日本の対ソ感情を変えるには、ゴルバチョフはそこをはつきりさせなければ駄目だと思う。日本側も、それは昔のことだから、という態度ではいけない。公の場でその問題をはつきり出すべきだ。「カチンの森事件」なんか、最終的にはソ連も認めただから、まずそこが西国のノーマルな関係の出発点になると思う。いままでその問題が、政府レベルで話し合われたこととは、ないと思うので、日本の中でも統一見解を出し、ソ連側にもその問題は避けて通れないんだということ、あらかじめはつきり知らせるべきだ。

佐藤 私も賛成だ。あれだけスターリン批判をやっているなら、例えばシベリア抑留問題についてソ連の最高指導者が遺憾

の意を表明するのは、領土問題解決の入り口としても当然やるべきだ。

和田 ただ問題は、日本とソ連のこの間の戦争をどう評価するかだ。日本から見ると、ソ連は火事場泥棒ということになるが、歴史的に見るとあの戦争は米国や中国に対してやった戦争の一環であることは否定できない。ポツダム宣言を発した四カ国の一つがソ連であることは事実で、中立条約破棄の問題はあ

るけれども、ソ連が参戦したがゆえに、日本はポツダム宣言受諾に軍部は動いたし、天皇の聖断も降りたことは、歴史家が大体認めている事実だ。ソ連の参戦をあの戦争から全部切り離すことはできないだろうし、ソ連側もこのことは譲らない点だろう。しかし、そのうえでいろいろ問題があることは明らかで、シムシユ（占守）島を攻撃し

た点、これはほとんどスターリンの犯罪だと思ふ。爲て合同慰霊祭をやるべきだ。そして六十万人のシベリア抑留問題について、ゴルバチョフはスターリンの政策と結びつけてはつきりした表明をすること。さらに四九年に行われた戦犯の問題について、再審を要求すべきだ。この二つの点はどうしてもやらなければいけないと思う。

## エビだけで タイは釣れない

——ゴルバチョフは訪日のさい、ハバロフスクに立ち寄り、日本人墓地に献花する話が進んでいる。また、日本人抑留者名簿と日本人墓地所在名簿が発見されたので、ゴルバチョフが携行することになる模様だ。

西村 そういうことは非常に

結構で大きいにやるべきだが、それよりも日ソが一つの精神的価値を共有することが重要だと思ふ。外交面から見ると、今年度のイラクのクウェート侵略に対して、日ソが共同声明を出したのが一つの好例だ。

——日ソ両国が解決を迫られている経済問題はどうか。

佐藤 日ソ貿易の量は総額で六〇億、前後で、八〇年代に入ってからずっと横ばいだ。しかし、ソ連は大きな資源国だし、経済ペレストロカが成功したら、大衆消費社会の入口に入っている社会だから、ソ連の市場は大きい。当面、一〇〇億、から一

二〇億の商品借款の対ソ供与によって過剰流動性を吸収、マクロ経済バランスを回復して、改革が実行できる基盤整備をする以外にどうしようもない。軍事クーデターを買い取ると考えたら、むしろ安いものだ。

木村（汎） 領土問題は日本がソ連に要求している問題で、経済問題はソ連が日本に要求している問題だ。結局、これの取引になると思うのだが、西独や米国は日本よりやり方がうまい。先に与えたあとで必ず取れるようにしておく。ゆるやかなリン

テージ（連関）をやっている。魚を釣るときに、エビだけでタイを釣ろうとするのは無理で、まず「まき餌」をまいておく（笑）。それが生きてくれば、捨てることにはならない。

佐藤 私がハンガリーにいたとき、ハンガリーの新聞が「コールはドイツ統一を買い取った」と大きな見出しで書いていた。それをよその国が言うのはいいが、自分で言っちゃいかん。

今井 そうそう。「まき餌」っていうのを日本人が言っちゃいけない（笑）。シベリアを日本とリンテージして、新しい産業地帯にしたいというプランが、ソ連国内で具体的になっている。ゴルバチョフは恐らく、そういう案も持ってくると思う。日本はそれに対応する民間の動きも、合わせて進めていいてはならないか。

西村 他のアジア諸国、たとえば中国なんかと違うのは、日本はソ連に対して経済援助を与えねばならない道義的責任はない。結局、日ソの相互理解を促進するための援助なり経済協力ということになる。これには緊急援助と長期的な援助の二つが考えられる。ペレストロイカを



中嶋嶺雄氏

成功させるための緊急援助については、なかなか計算し切れないと思う。日本としては長期的な援助つまり、生産施設の近代化よりも、インフラストラクチュア（経済基盤）、公害対策といった面について、財政資金その他の公的支援で民間活動を啓発する。あるいは技術移転を進める。極東地域の「経済特区」と言っても、回りのインフラが全然ない。もつと長期的に、ソ連の市場経済が進んで、日本企業の資本がどんどん入っていくような条件をつくっていく。それを政府がある程度バックアップする形がいいと思う。

今井 米国が赤字財政でも、ゴルバチョフを援助するのは、長期的に見てゴルバチョフ政権が推進している政策を支持しないとツケが回ってくる計算だろうと思う。西村先生のお話は、経済的バランスがとればという意味での相互利益だが、巨体の隣国がどう変わるかは、経済バランスだけじゃなしに、その国がどういう性格の国になるかで、今後の日本の外交などに影響してくる。ゴルバチョフが指導者として、成功するか失敗



西村文夫氏

するか以上に、日本の将来の政策にどの程度利益があるかが重要だと思う。

ゴルバチョフという歴史的人物が持っている可能性を考えて、これを利用するか支えて、日本の目の前の大国の民主化とか自由化を促進する計算もあっていいのではないか。

木村(浩) ただ私のゴルバチョフに対する評価は、非常に低い。メーデーのスローガンがもとで、大統領不敬罪の裁判が始まったが、この期に及んでそんなことをやる体質は相当にひどい。ソ連に即刻やつてもらいたいのは、コミュニケーションの面だ。電話がこちらから自由にかけられるようになったが、向こうからはダイレクトにかけられない。ファクスもそうだ。あの大「アガニョーク」誌でさえ、海外に自由にかけられる自動電

話が一台、ファクスも一台しかない。

## 大統領でも片づかない領土問題

——領土問題については、どう考えるか。

木村(浩) 日本とソ連の間に血が通い合うには、のどに突き刺さったトゲを抜かねばならない。「ソ連の脅威」を打ち消すシンボルとしての四島返還の意味を、そこに含めるならば、「私の

国は非常に大きいから返してあげましょう」ということがあってもいいのではないか。

西村 日本は戦後、平和外交を標榜して、対外関係は暴力とか戦争に訴えないことやってきた。この際、ソ連側は、スターリンの拡張主義政策を清算したのだというはつきりした証拠を見せることが、日ソの今後の関係にとって最大に重要なことだ。ゴルバチョフは四島返還を決断してもらいたい。

和田 日本は四島返還を主張しているが、ソ連としては五十六年に戻って、二島返還から出発するしかない。だから四島と二島の間で解決するしかない。四島と二島の間で、妥協で解決するとなったら、捉提、国後はソ連領のまま四島を共同経営とし、非武装化して、自由往来を図る方法で、解決する道が一

つ。もう一つは、三島で解決するということ。ただしソ連側にしてみれば、二島から三島に踏み出していくにもいろいろ障害がある。ロシア共和国が主権宣言の中で、領土の変更には国民投票が必要だと決めた。民族問題とか民主主義が進んで、ゴルバチョフが共産党書記長の一存でやることができない。だから、ゴルバチョフが来日した段階で、最低一島は返すことをソ連は日本にはつきり約束して、そのうえでソ連がプラス・アルファをつけるために暫定期間を置き、三年後、五年後に平和条約を結ぶというこの間出してきた案は、一つの妙案でないかと思う。

佐藤 ゴルバチョフをはじめ向こうの為政者としては、日本関係を改善したらこれだけよくなるんだという説得力が必要だと思う。そこに配慮すべきだ。

木村(浩) ただとりあえず二島、あと二島についてはうんぬんということだと、しこりが残ると思う。スパツと四島返すことが、日ソ関係の新しい発展につながる。その場合四島にいるソ連人に永住権を与えていいんじゃないか。あそこで生まれた



和田春樹氏

人もいるのだから、日本に返してもらったとたんに全部追い出すというのは、それこそ人道問題にもかわかる。いままでその議論がなされていない。

中嶋 四島一掃返還が実現できればいいが、ゴルバチョフ訪日ですぐ実現するわけにはいきまい。日本は戦争に負けて、ソ連に取られたのだ。いかに不当であつても。そして戦争に負けた国がいまや世界最大の債権国であり投資国。それが領土まで戦前に復することが持つ国際的意味を考えると、やはり日本が



白井久也氏

ある程度抑制する時期ではないか。これから二十一世紀にかけては「民際外交」なんかが非常に大きくなってくる時代だ。今井 ゴルバチョフは、見返りがどんなものか見に来ると思う。その意味でも、日本がゴルバチョフのペレストロイカ路線を維持できるような物質的、経済的バックについて、彼が喜んで帰れるようなものをそろえて、その対価としての領土問題のはっきりした返還論を、時間がかかっても約束させることが望ましい。

## ゴルバチョフ大統領への十項目の提言

- シベリア抑留問題について、遺憾の意を表明せよ (木村汎、佐藤隆明、和田春樹各氏)
- シウムシユ (占守) 島で合同慰霊祭を行え (和田春樹氏)
- 四島返還を実現せよ (木村浩、木村汎、中嶋領雄各氏)
- 日本各地の各層、各界の人々に接して、対話せよ (今井義夫氏)
- エリツイン氏と意見調整をしてから来日せよ (和田春樹氏)
- スターリンの拡張主義政策を清算し、「新政治思考」を現実に実行せよ (西村文夫氏)
- 北方四島の軍事力を撤去せよ (木村汎氏)
- 一九四九年の日本人戦犯裁判の再審を要求する (和田春樹氏)
- コミュニケーションの改善を即時実施せよ (木村浩氏)
- 訪日時に二島返還を約束し、四島を共同経営とし、非軍事化と自由往来を実現し、ソ連国民の支持があれば、三〜五年後の平和条約締結時に、もう二島返還せよ (和田春樹氏)

しい。

——ゴルバチョフ大統領に対する提言をお願いしたい。

佐藤 日本国民の心理的なわだかまりを解くことを考えて、是非ともシベリア抑留問題について、遺憾の意を表明してもらいたい。

木村 (汎) 第一はシベリア抑留問題で遺憾の意を表して、何らかの具体的なことをフォローアップする行為がとられること。二つ目は北方四島に展開している軍事力の撤去。三つ目は領土問題の存在を大統領の主導で公的に日本政府に対して明確にし、かつ五六年の日ソ共同宣言の線に戻る。あとの二島は平和条約を目指して交渉を続けていく形で、明確なメドがあるようなものを共同コミュニケに書き込み、そこから後退しない保障をしてもらうことだ。

今井 政治家との接触だけでなく、各層のいろんな国民に接して日本を知ってもらって、同時に日本人もソ連はああいう大統領が出てくる国だということを知って欲しい。

和田 ゴルバチョフは訪日の前に、エリツインと意見を調整

してもらいたい(笑)。

中嶋 領土問題は一〇〇年でも二〇〇年でも待つべきだという意見が一部にあるけれども、第二次大戦の処理は今世紀中にしなければいけない。その意味で日ソ双方ともそんなに時間はない。

木村 (浩) ただ一つ危惧があるのは、こう言っては不謹慎かもしれないが、米年四月まで彼があのポジションを保っていられるかどうか(笑)。これは冗談ではなくて、モスクワのインテリたちもその危惧を持っていてる。ゴルバチョフばかりじゃなくて、相手はソ連だというスタンスを、常に考えていなければならぬと思う。

西村 要するにソ連が「新政治思考」の何物たるかをちゃんと、現実に実行すればいいだけの話。いままでのスターリン主義的なものを本当にやめたということをね。

——長時間どうもありがとうございました。

(文中敬称略)

朝日案内株式会社

国際室